

Allegory
Of
Color

しきざいの
ぐうい
色彩の寓意

ーゲーテの遺産

正道

SEIDOU

I

目次

色彩の寓意 I

はじめに	3
------	---

全体の目次	3
-------	---

序章 色彩は何を語るか

(1) ゲーテの色彩論	5
(2) 補色と色相環	7
(3) PCCS に関して	11
(4) 五つの座標に関して	13

第1章 黒（座標1）

(1) 黒と白の特殊性	18
(2) 黒が象徴するもの	21
(3) 温かな泥	24

第2章 膨張色と吸収色

(1) 彩度と明度の確認	28
(2) 外から内へと収縮する色	31

第3章 紫（座標2）

(1) 外向的な色	35
(2) 昆虫に似ている精神構造	36
(3) 制服の効能	38

第4章 異質なものの平等性

(1)	価値の並列	42
(2)	男尊女卑の克服	46

色彩の寓意I

はじめに

『色彩の寓意』——『ネチェリケト』につづく「ヘルメティック・トリニティ」の第二位格です。本書は、私が二十年以上も温めてきた作品であり、錬金術哲学、錬金術神学のなかで、非常に重要な位置を占めるであろう作品です。

この『色彩の寓意』は、私が絵を描く人間であり、かつ文豪ゲーテのファンであったからこそ、発想された作品だと言えるでしょう。

とくに重要なのはゲーテとのつながりです。

そして、そのゲーテが、自分の作品のなかで最大級の愛着を持っていたものが『ファウスト』と、この『色彩論』なのです。

ここには確かに、老文豪の愛着に見合うだけの高い価値があります。というのも『色彩論』には、ヘルメスの徒にとって宝とも言うべき真実が「象徴として」散りばめられているからです。

今回、そのゲーテの遺産を受けつぎつつ、そこに私のオリジナリティを加味して、ひとつの哲学体系に仕上げました。読者がここから、色彩のもつ神秘性を感じ取ってくれば幸いです。

全体の目次

序章 色彩は何を語るか

- 第1章 黒（座標1）
- 第2章 膨張色と収縮色
- 第3章 紫（座標2）
- 第4章 異質なものの平等性
- 第5章 赤と緑（座標5）
- 第6章 黄（座標8）
- 第7章 黄色から紫への相転移
- 第8章 白（座標9）
- 第9章 紫族のための宗教

おわりに

序章 色彩は何を語るか

（１）ゲーテの色彩論

錬金術師に連なるゲーテ

本書『色彩の寓意』では、そのタイトルのとおり「色」を手掛かりにして、ヘルメスの杖に秘められた性質を明らかにしていくことになる。

ヘルメスの学徒である錬金術師たちも、この「色」に関しては、ひとかたならぬ関心を持っていた。それについては、すでに一度引用したことがある、

「卑金属を貴金属に変えるための作業は『投影』とよばれ、変成（変質）そのものは『着色』とよばれた。〈黒化〉〈白化〉〈赤化〉の例を持ち出すまでもなく、錬金術師は一般的に、色の変化に執着した」

という文章からも明らかである。これは澤井繁男氏の『錬金術』からの引用だ。

そして、そうした錬金術師を主人公にした、世界最高峰の文学作品が、ヴォルフガング・フォン・ゲーテの『ファウスト』だった。

かような錬金術文学の作者に相応しく、ゲーテもまた「色」に執着した。いや、執着したどころか、格闘し、これを大成したと言ったほうがいいだろう。なにせ、ニュートンの『光学』と、ゲーテの『色彩論』は、現代における、色彩論の二大基礎となっているのだからである。

ニュートンの光学

ニュートンの『光学』が出版されたのは一七〇四年、ゲーテの『色彩論』が出版されたのは一八一〇年のことだった。だから二つの著作の間には、百年ほどの開きがある。となれば、ゲーテにとっては、ニュートンは大先輩に当たると言えるだろう。

ところがゲーテは、この大のつく先輩ニュートンに噛みついた。というのも、ゲーテの色彩論は三部形式になっており、そのうちの第二部が「論争篇―ニュートン光学理論を暴く」と銘打っているからである。

ではゲーテは、ニュートンのいったい何に噛みついたのか。

科学者であるニュートンは、色というものは「光の性質」であると考えた。そして彼は、プリズムを使って、白い光を七色に分光する実験を行った。プリズムとは、ガラスや水晶でできた、幾何学的な私たちの透明体である。

そうしてニュートンは、私たちが目にする「色の違い」は光の波長の違いであるとした。この波長の違いによって「赤、橙、黄、緑、青、藍、紫」という各色が生じると主張したのである。

これを『光学』を読むことで知ったゲーテは、さっそくニュートンの先業に倣ってみた。つまり彼も

また、プリズムを使った分光実験を試みたのである。

ところが、その実験方法に、致命的な不備があった。

おもむろにプリズムを自分の手に持ち、そのままプリズムを覗き込んだゲーテ。これはニュートンのやり方とは全く異なっていた。ニュートンの実験装置は、それなりに手の込んだものだったのだ。

そのためゲーテは、百年前にニュートンが得た成果を、どうしても追体験することが出来なかった。きつと「おいしいニュートン、おかしいじゃないか」という感じだっただろう。

ニュートンを駁する

右の体験をもって、ゲーテは「ニュートンに誤りあり！」と大いに反発した。ゲーテは言う。

「色光線を七個の円い相互に孤立せる形体へ隔離することは、一種のお伽噺であって、ただ紙の上に虚の図形として描かれるだけで、現実には全く表現されてないことである（菊池栄一訳。旧字を常用漢字に改めた）」

これを分かりやすく言えば、

「白色光線をプリズムによって、個々の七つの色相に分離させる——そのような実験は、一種のお伽噺である。それは文章上でのみ書き表せられる虚像であって、現実のものとはなりえない」

といったところだろう。

しかしながら、ゲーテの同時代人にも、科学的に誤りがあるのは、ゲーテのほうだということが分かっていた。現代の、より発達した科学的視座から見たら、なおさらその誤りは明らかだろう。

そのためゲーテの『色彩論・論争篇』は、自然科学者としてのゲーテにとって、ある種の汚点となっ

てしまっている。

けれども、科学的には誤っていたゲーテのプリズム実験は、皮肉にもゲーテに、ニュートンとは全く異なる「色彩論」の分野を開拓させることになった。すなわちゲーテは、ニュートンの追従者ではなく、新たな学問の開祖となったのである。

そしてそれは「光学」ではなく「色彩心理学」と呼ぶべきものだった。

光と闇の中間現象

さしあたってゲーテには、かの「不備な」光学実験のさい、プリズムによる分光現象が、光と闇の境界面のなかで現れたように見えた。つまり「光、色彩、闇」の並びである。そのため、まず彼は、色は「光と闇の中間現象として生まれるもの」と定義した。換言すれば、

「すべての色彩はどのような種類のものであれ、それらが白より暗く黒よりは明るく見えるという点において灰色と一致する」ということだ。

つまりニュートンが光だけを対象とした（＝光学）のに対して、ゲーテの視野のうちには、光に加え

て、闇の性質までもが含まれていたのだった。これだけでも、ニュートンとゲーテの異質性は決定的なものだと言えよう。

そしてゲーテは、右の結論をさらに単純化して「色は曇りのなかにある」とも言っている。曇りとは、晴れと雨の中間であり、明るさと暗さの中間である。

そして翻って見てみれば、私の「ヘルメスの杖」とは、まさしく闇と光とその中間（曇り）のすべてを網羅した体系なのではあるまいか。とくに座標2から座標8までの領域は、まさしく「曇り」の世界であろう。

ここにゲーテの「色彩論」と「ヘルメスの杖」との強い同通性がある。

（2）補色と色相環

互いを求める色

次に重要な主題となるのが、補色と色相環である。

補色については、まずゲーテの実験風景を眺めてから叙述を始めよう。ゲーテは、自分自身が実行した実験をもとに、読者へ次のようなことを勧める。

「青いガラスを通してしばらく「その青みがかった景色を」眺めるがよい。

そうすると外界はその後、それを取り去った眼に、たとえ曇天で秋の無色の風景であっても、あたかも太陽に照らされたように「オレンジ色っぽく」見えるだろう。

同様に緑色のサンングラスをはずすと、種々の対象は赤味のある輝きを帯びて見える」

このような事が起こるのは、青の補色がオレンジであり、緑色の補色が赤だからである。この補色を、ゲーテは「正反対の色彩が、継起的に、網膜上で互いに要求し合うさま」と説明している。

そして、要求された色同士が「合一」したときに現れるのが、無彩色（白、灰色、黒）である。

つまり、ある一つの色は、その補色を自動的に喚起して、それらの合一のもとに、無彩色を生み出そうとするということだ。それこそ、まるで男女が互いを求めて、ヘルマプロディトス（両性具有）になろうとするように。硫黄と水銀が化合されて、黄金を作り出すと信じられたように。

ここでは、いかにも錬金術的な世界観が展開されている。

なお、私が専門学校時代に使用した教科書『色彩』には、補色の説明として次のように書かれてあった（東京デザイナー学院出版局）。

「二つの色光、あるいは色料から反射する色光を混合して、ニュートラル・グレイかブラックを生じる時、補色または余色という」

ゲーテの色相環

そして、この補色という関係性を、円環の形で図示したのが「色相環」である。これについてゲーテは言う。

「この対立（補色関係）によってそもそもいかなる色彩がほんらい呼び起こされるかを簡単に知るためには、われわれの図版の中の彩色をほどこした色相環を利用するとよい。

この色相環は全体として自然に即した仕方で作成されており、ここでもなかなか役に立つのである。

というのは、その中で（Ⅱ中心点を通る形で）直線上に相対立する色彩は、眼の中で相互に要求し合うものにほかならないからである。そこで黄は莖を、橙は青を、深紅は緑を要求し、またその逆も行われる」

これについては、実際に図版を見てもらうのが一番よいであろう。左に示すのが、ゲーテによる色相環である。

ゲーテ色相環.png



ゲーテの色相環

ルベドの優先

このゲーテの色相環においては、その頂点に置かれている色は赤である。緑以外のすべての色は、昂進して（高まって）赤に近づくという。

ところが、このあとに紹介する現代的な色相環では、この赤のポジションが、黄色に取って代わられている。その理由は、現代の色相環では、縦の軸の目盛りを「色の明るさ」に合わせているからである。じっさい、その色相が最も鮮やかになるとき、黄色は赤よりもずっと明るい。ゲーテも黄色を「光に最も近い色」と言っているぐらいだ。

ではなぜゲーテは、あえて「赤」という色を、色相環の「最も高いところ」に置いたのだろう。あまつさえ「昂進」という言葉で、その価値を著しく高めてまで。

これは私見であるが、ここでゲーテは、自分を「錬金術師の立場」に置いていたのではないだろうか。そのうえで彼は「赤」という色を論じたのではないだろうか。

すなわちゲーテは、錬金術における最高の境地である「ルベドとしての赤」をその念頭に置いていたのではないか、ということだ。

それを裏づけるように、上述のとおりゲーテは、赤以外のすべての色は「昂進して」赤に近づくと言っている。

この昂進というものが具体的に何を意味するのかは、結局のところ、私にも分からなかった。けれども「昂ぶり、進む」というのだから、ともかく、それが一種の高次進化であることは間違いないまい。

そのような高次進化の究極に赤がある、とゲーテは考えたわけだ。

色彩論にルベドは含まれず

しかし、ヘルメスの杖によれば、色彩が成立する「曇りの領域」というのは、それほど上下に拡張しようとも、せいぜい「混在的一者」から「アルベド」までの領域（座標1～座標9）なのである。

ゆえに、そこにルベド（座標10）という「錬金術の最高位としての赤」は、まったく介入することがない。一般的な色としての赤は出てくるが、これはルベドとしての赤では、決していない。最高位の赤ではなく、いわば中間位（座用5）の赤なのである。

そのため、白に近い黄色を頂点とした現代の色相環のほうが、よほどヘルメスの杖とリンクしてくれる。それは本書の第1章以降に接すれば、読者も容易に納得してくれることだろう。

よって色相環に関しては、私はここでゲーテを捨て、現代におけるそれを採用することにする。ここで、そのように堂々と宣言したい。

(3) PCCS について

心理補色色環

さて、これまで「現代の色相環」という言い方をしてきたものを、これからは「PCCS」と呼ぶことにしよう。これは「プラクティカル・カラー・コーディネート・システム」の略である。

日本語では「心理補色色環」とか「日本色研配色体系」などと呼ばれているが、その名の通り、これは日本で開発された色相環である。一九六六年（昭和四一年）に、日本色彩研究所が発表した。

そして、その名前のうちに「補色」という言葉が挿入されていることから分かるように、これは基本的にゲーテの「色彩論」の末裔といえるべきものである。

それでは、実際にPCCSを見てもらうことにしよう。

P
C
C
S
の
色
相
環
.
p
n
g



PCCS

(プラクティカル・カラー・
コーディネート・システム)

彩度と明度

PCCSでは、まず各色相の「彩度が最も高まった状態」のサンプルを用意している。専門用語では、これを「純色」という。

彩度とは色の鮮やかさであり、それが最高の状態にあるということは「その色の個性が、最も純粋に発揮されている状態」とも言い換えることが出来る。

そして、この彩度というものは「明るさ」によって、その純度が左右される。

たとえば紫を明るく（薄く）すると、藤色のキレイな色味となるが、そのとき紫としての鮮やかさは、著しく後退してしまう。逆に言えば、紫の圧倒的な存在感（＝鮮やかさ）は、かなり暗いところでない

と発揮されないのである。

逆に黄色を暗くすると、緑がかった鈍い色になってしまう。つまり黄色は、相当に明るくしないと鮮やかにならない色なのである。このように「彩度」と「明るさ」は、各々の色のなかで「連動」とでも言うべき関係性をつくっている。

ゲーテも色彩論のなかで「黄色は白に最も近い色」とか「紫は黒に最も近い色」といった言葉を残している。ということはゲーテも、この色相に見合った明るさ（明度）については理解していたわけだ。

ヘルメスの杖との同通

それでもゲーテは、かの錬金術的理念によって、あえて「赤」を円環の最上位に置いた。

それに対して、PCCSでは、各色相の純色を導き出すための「明度」を、色相環の縦の軸として用いている。そのためゲーテの色相環のように、赤（ルベド）が最上位に置かれることはない。

右の話からも想像がつくように、PCCSにあつては、その最上位に置かれることになる色は「黄」であり、最下位に置かれる色は「紫」なのである。そして、これは色相環を「ヘルメスの杖」の内容とリンクさせるには、本当に「もってこい」の序列となる。

よって、私は「色彩の寓意」を語るにあたって、そのための標準的な色相環として、PCCSを用いることを、ここに再び確言することにしよう。

（４）五つの座標に関して

座標0と座標10の除外

ところで、ヘルメティック・トリニティの三書（色彩の寓意、ネチェリケト、ヘルマプロディトス）

の本文は、いずれも五つの座標について語られることになる。

しかし『ネチェリケト』と『ヘルマプロディトス』が、座標0、1、5、9、10で構成されるのに対して、本書『色彩の寓意』だけは、それとは異なる座標を描写することになる。

すなわち、この『色彩の寓意』で考察の対象となるのは「座標1、2、5、8、9」なのである。

どうしてそうなるか。それは、座標0が意味する「闇Ⅱ虚無」と、座標10が意味する「発光Ⅱ無から創造」が、明らかに「色彩」の範疇を超えた現象だからである。

まことにそうなのだ。何よりゲーテ自身が「色彩は曇りのなかにある」と喝破しているのだから。

暗闇と発光現象は、明白に、その「曇り」の範疇を超えている。暗闇が色彩を持たないことは言うに及ばず、ゲーテが、

「色彩というものは、その最も明るい状態においてさえ暗いものである」

と語るように、明るすぎて当然、眩しすぎて当然の「発光現象」もまた、色彩とは一線を画しているのである。

結論をまとめれば「本書はあくまでも『色彩の寓意』であって、色彩以外のものを取り扱うものではない」ということだ。

黒、紫、赤、緑、黄色、白

では、座標0と座標10を取り除いたとき、残りの五つの座標は、いかなる色相を指し示すのだろうか。それについて、ここで一覽を掲げることしよう。

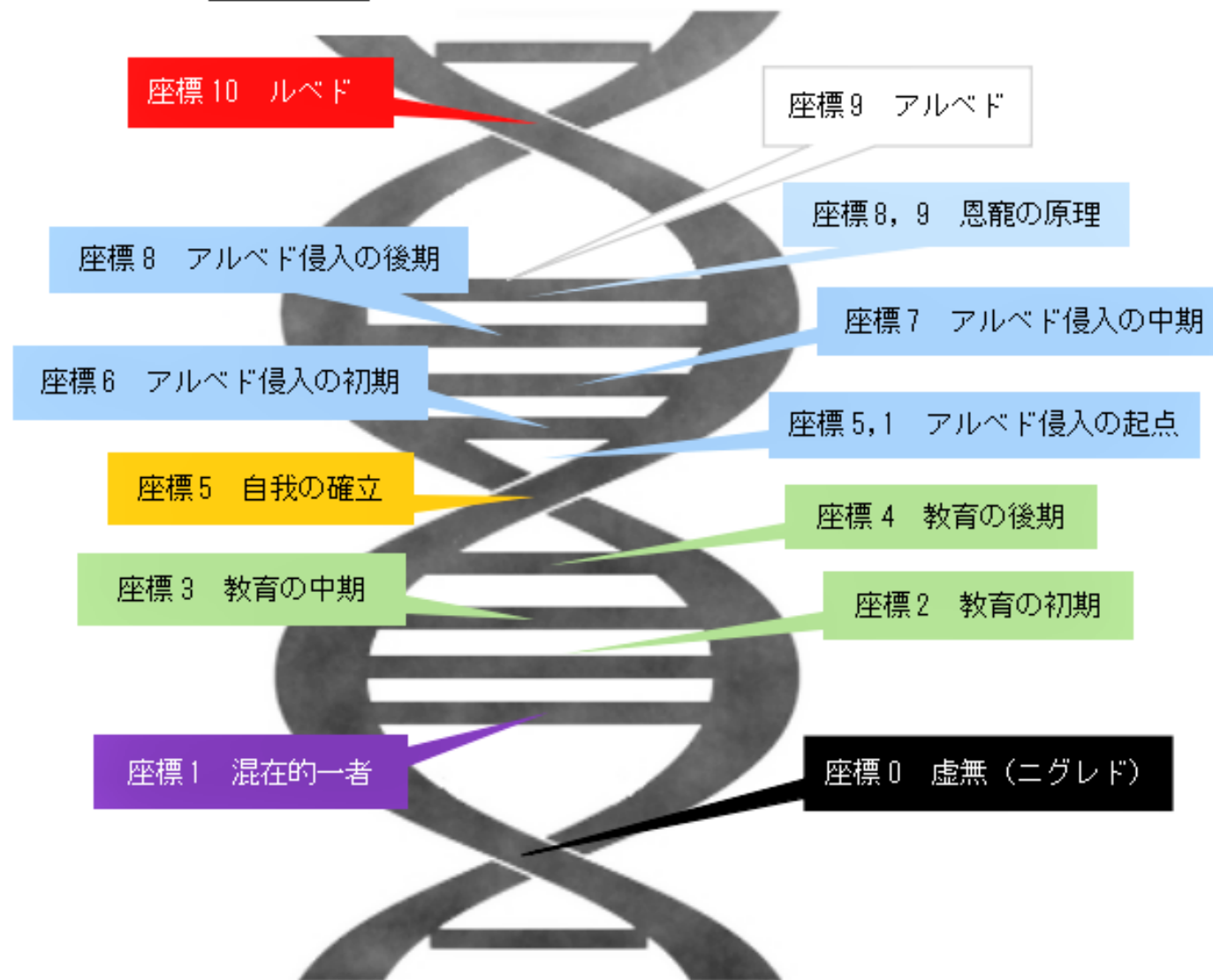
そうしてみると、

座標1	黒
座標2	紫
座標5	赤と緑
座標8	黄
座標9	白

ということになる。

もっとも、紫と黄色に関しては、座標との一致性が曖昧で、もしかしたら紫は座標3が相応しいかもしれないし、黄色は座標7あたりが相応しいかもしれない。

座標図



とはいえゲーテは、自身の色彩論のなかで、黄色を「これは光に最も近い色彩である」と言っているし、紫については「黒いものに付随して惹き起こされるものは、青または赤みがあった青（＝紫）の現象を直接に伴っている」言っている。

そこで私は、このゲーテの意志によりそい、より白（座標9）に近いところに黄色を（座標8）、より黒（座標1）に近いところに紫（座標2）を置いたのである。読者にあつては、それ以上の科学的厳密性は求めないように希いたい。

なお、ゲーテは紫を表すのに「堇」「赤青色」「青赤色」といった言葉を使っているが、私はこれらの色を、あえて「紫」という色相名によって一括してしまいたいと思う。

もちろん、ゲーテが挙げた色相名のほうが、より緻密な色のニュアンスを、適切に読者に伝えることが出来るだろう。しかしながら、本書で追及されるのは、そうした緻密な問題ではなく、もっとずっと大まかなものである。

そのように大まかである証拠に、私は本書で「青」や「橙（オレンジ）」といった、著名な色相にすら、言及しなかった。つまり、本書で考察されるのは、あくまでも「ヘルメスの杖」の座標と直接的に関わる色相だけなのである。

では、以上の前置きを経たうえで、ようやく本編へと入っていくことにしよう。

付言

本書におけるゲーテの言葉は、そのほとんどを、木村直司訳の『色彩論』に拠っている。

この訳書からの引用は、本当に数限りないほどである。ゆえに、いちいち引用に訳者名を記すことは、読む側にとっても煩瑣なことであろうと考え、それをしなかった。よって読者は、訳者名のない引用に関しては、自動的に木村直司訳であると思っしてほしい。

ほかに菊池栄一訳『色彩論』からも引用を行ったが、そのときには訳者名を書き添えた。数が極端に少ないからである。なお、木村訳は、ゲーテの『色彩論』の第一部の訳出、菊池訳は第三部の訳出である。

第1章 黒（座標1）

（1）黒と白の特殊性

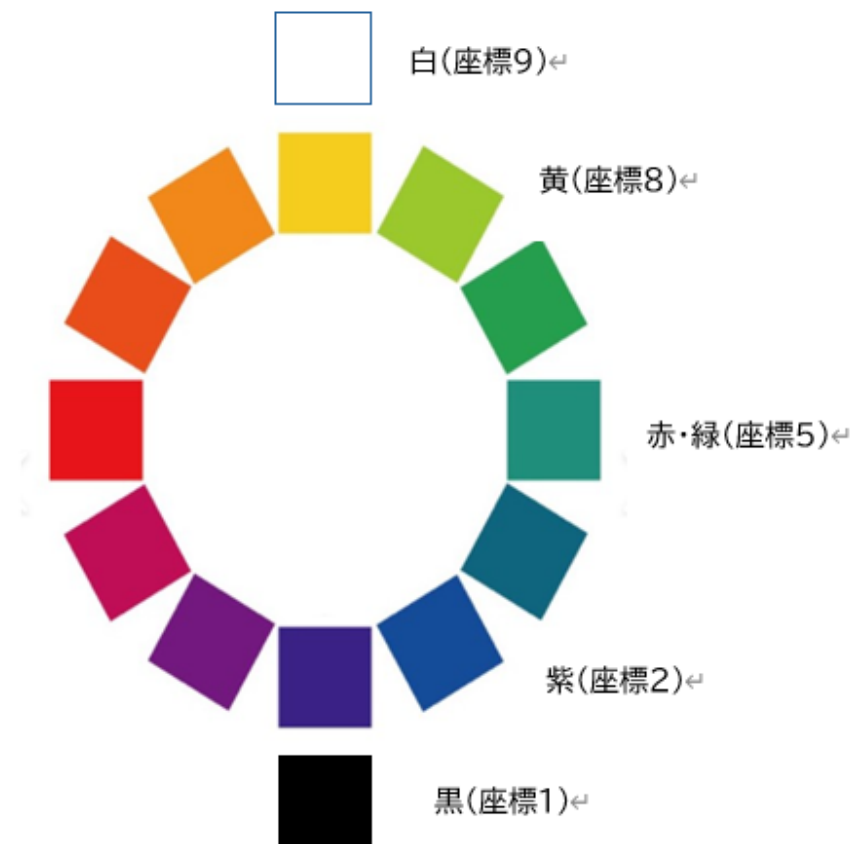
色か闇か

まず黒という色から始めたい。

もっとも、この「黒」という色は、PCCSの色相環には含まれていない。この色の置き場所をつくるとしたら、色相環の底辺にあたる紫の、さらに下ということになるだろう。

ついでに言うておくと、黒と対照的な「白」もまた、位置事情はこれと同じである。PCCS上に白の置き場所をつくるなら、色相環の頂点を占める黄色の、さらに上に位置づけるしがあるまい。

P
C
C
S
+
ヘ
ル
メ
ス
の
杖
p
n
g



PCCS + ヘルメスの杖

ところで私は、中学生のときの美術の授業で、「白と黒は色ではない」と習った、そういう記憶を持っている。では色でないならば何なのか。それを美術の先生は「光と闇だ」と教えてくれた。

私自身、この考えに長らく呪縛されていたのだが、現在では、自分のなかで明確に、これを否定している。そして、そのうえで「白と黒は色として扱ったほうがよいものだ」と考えている。

なぜなら、それら白と黒は、間違いなく、パレット上に出せる「色」であるからだ。

たしかに白と黒には「色」と「光と闇」の境界のような性質がある。ことに白に関しては、アルベド（白化）が「形而下と形而上の境界」にあるのと同じような匂いがする。

少なくとも「白光」とか「漆黒」のような言われ方をされるときには、そこに白と黒の文字が入っていても、これは間違いなく「光と闇」であろう。

本物の光と闇

しかし厳密に言えば、本物の光と闇は、色という「存在するもの」を超えたところにある。

そして真の意味における光と闇とは、紛れもなく「発光」と「虚無」のことである。存在を照らす光源であるところの「発光」と、存在のすべてを自身の闇のうちに吞みつくしてしまう「虚無」のことである。ヘルメスの杖においては、これらはそれぞれ「ルベド」と「ニグレド」の座標に相当している。ただし、より厳密に言えば、このニグレドは「更新されたニグレド」と呼ばれるべきものである。

さて、そのような確認をとった上で言うのだが、ルベドとは「虚無からの存在の創造」であり、虚無と存在の総合である。

よってルベドは、虚無の加勢によって「存在」を超越している。

他方ニグレドは、元来が虚無であるので「存在」ではない。

かくして、本物の光と闇であるところの、発光と虚無は「色（存在）」ではないことになる。

ついでに言う、色というものは、これを仏教用語として見たときも「現世的に存在しているもの」を指している。色即是空の「色」が、まさに、そういう意味合いにおける、典型的な使用例であると言える。

そして、右で語ったように、発光と虚無とが「存在」と異質なものの、あるいは「存在」を超越したものであるならばだ。これらを「色彩論」の範疇から除外することは、仏教的にも、きわめて道理に適ったことになろう。

黒と白は色である

さて、発光と虚無が色でないのとは対照的に、白と黒は、かなり高いパーセンテージで「存在＝色」である。

たとえばライトで黒い紙を照らしてみても、私たちはそこに「黒い色がある」と認識することが出来

る。黒い色が「在る」と。

ここには、闇との大きな違いがある。というのも、もし闇のなかに黒い紙を置いたならば、そこに黒い色（紙）があること自体を、私たちは認識することが出来ないからである。もしも闇をライトで照らせたなら、もう、それ自体が「闇」ではなくなってしまうだろう。

つまり光で照らし出せるということは、それがすでに、黒が一つの「色∥存在」であることの、何よりの証明なのである。

では、今度は白のほうを見てみよう。

私たちは「白」という色を、赤や黄色や青と一緒に、ひとつの画面（紙）のなかに組み込むことが出来る。

ここに発光の決定的な違いがある。

というのも、もしも眩しいほどの光で照らせば、そのときには赤や黄色や青という色も、即座に認識できなくなってしまうのだからだ。あるいは、そのとき私たちには、そこに紙があること自体が分からなくなってしまう。

そして発光とは、それ自体が光を放っているということなのだから、その光源を見れば、眩しいに決まっている。

つまり、他の色と共存できるということは、それがすでに、白が一つの「色」である（∥発光ではない）ことの、何よりの証拠なのである。

（2）黒が象徴するもの

黒い大地

では、闇ならざる黒が寓意しているものは何だろう。

私のなかで真っ先に思い浮かぶのが「大地」である。ただし、ここで言う大地は、茶色や灰色といった色合いの、いわゆる「赤土」で出来た深部層のことではない。それは文字どおりに黒い「黒土」で出来た表層のことである。

光が差し込まないほどの深部にある赤土は、それ自体は固有色を持っても、実質「闇」に呑み込まれてしまっている。それゆえ、色（赤）の役割を放棄させられてしまっている。

前節の復習となるが、こうした「黒土と赤土の立場の違い」は、実に分かりやすく私たちに「黒」と「闇」の違いを教えてくれている。そのための最適なサンプルとなってくれている。

大地の薄さ

ところで、かつて北海道で、大規模な地震があったときのことである。たしか二〇一八年の胆振東部地震であったかと思うが、私は現場の様子を、テレビのニュースで視聴していた。

そのときテレビ画面に、山地における地滑りの映像が映った。まるで山が真つ二つに割れたかのように、山の前側が、ずっと下のほうまで滑落してしまっていた。

それによって山の後背部の地層がむき出しになったのだが、これを見て私は、他人から見ればきっと「変なところ」に驚いた。というのは、私は、そのとき画面上に露になった「大地の薄さ」に対して驚いたのである。

事実、黒い表層（大地）の厚みは、これを多めに見積もってみても、せいぜい五十センチメートルほどのものだった。そこから下は「赤茶色い土くれの層」が、層ごとの色味をわずかに変えながら、延々と、山裾まで続くばかりだったのである。

ということはだ。私たちがイメージする黒い大地は、家でいえば「門」とか「玄関」程度のポジションでしかなかったのである。居住スペースまでは至らない部分、換言すれば、建物の「添加物」ぐらいの役割しか担っていなかったのだ。

これは北海道に限らず、どこの地方であっても、事情はそう変わるまい。基本的には、赤茶けた分厚い土くれの上に、薄くて黒い大地が、まるで添加物のように乗っかけているのである。それが私たちの知る、いわゆる「大地」であったのだ。

黒い土の成分

では、この薄い表層の正体は何なのだろう。そこから下の地層とは、明らかに見た目を異にした黒土は、いったい何で出来ているのだろうか。

いや「なにで」といっても、私はここで、カルシウムやカリウムといった物質名を並べたい訳ではない。それは、ここで求めている答えではない。ここで求めているのは、もっと象徴的で本質的なものだ。そうしてみると、私は黒土をして、これを「死によって出来ている」と言わずにはいられない。あるいは、死体、死骸によって出来ている、と。

ここからしばらく『ネチェリケト』の繰り返しになるが、あえて話を続けよう。

黒土——それはまことに、かつては生き、そして死んでいった者たちの骸の集積であり、蓄積である。より具体的に言えば、植物の死骸、動物の死骸、そして少し前までならば、人間の死骸までもが「黒い土」の材料となっていた。

いま「少し前までならば」と断り書きをしたのは、現代の日本においては、火葬が義務づけられており、逆に土葬は固く禁じられているからだ。

それは何故かといえば、伝染病の予防や、狭い土地の問題、そして仏教における、いわゆる「荼毘にふす」という慣習が、日本を火葬の国にしたからである。荼毘にふすとは、死者を火葬することに他なら

ない。

ただしキリスト教圏やイスラム教圏では、いまも堂々と土葬が行われている。最後の審判時における「死者の復活」のために。

死と老廃物の堆積

それはさておき、黒い土の成分には、右で語った死骸のほかにも、糞尿といった老廃物も含まれている。いわゆるウンコとオシッコであり、多くの人々にとって汚らしい、あるいは取るに足らないつまらないものである。

それらが堆積し、微生物や真菌類（キノコやカビ）によって、分解、無機化されてゆく。そうして、いつの間にか、あの「黒い土」が出来上がっていくのである。黒くて暖かくて湿っている「黒い土」が。となれば、黒い土は言わば、死者と老廃物で作られた、黒い棺ということになる。

死穢を嫌う日本人であれば尚更だが、この黒い棺は、本来人間にとって、目を背けずにはいられない代物だろう。なにせ「穢土」という言葉すらあるのだ。潔癖症の人間ならば、これに、ほんの僅か近寄ることも嫌がりそうである。

ところが、たいていの人間は、事もなげに、あるいは喜んで「黒い土」に触れることが出来る。不思議なことだが、ホームセンターの園芸コーナーでは、値札さえ付けられた状態で「黒い土」が置かれている。つまり、それに「金を出してまで買う価値がある」ということを教えているのである。

生命の苗床

忌避したくなるものが、同時に、有用とされ親しまれる——この奇妙な矛盾はなぜ生じるのか。

それは、死者と老廃物でできた棺である「黒い土」から、同時に、真新しい生命が生まれるからである。木は、この黒い土のなかに根を張り、草はそこから芽吹き、そのなかの幾つかは、美しい花さえ咲かせる。さらには、豊かな実を結ぶ草木も数多ある。

むしろ、この「黒い土」によってのみ、命は育まれることになるのだ。

赤茶けた土くれ、あるいは鉱物としての土からは、生命は発しない。そこにあるのは「死もなければ、生もない静寂」である。よって、生命体である私たちは、そこに特別な感情を抱くことがない。

だが、命の苗床である「黒い土」には——同じく命である私たちは——特別な愛着を持たずにはいられないのである。

しかも都合のよいことには、それが死骸と老廃物の堆積物であったことは、私たち人間は、なかばシレッと忘れていられるのだ。じつに人間とは、忘却能力に特化した生き物である。

だが、ここではちゃんと思ひ出そう。黒い土は、たしかに「死者と老廃物でできた棺」であった。これは否定することのできない事実である。

そして、それと同じ黒い土を、黒い棺を、私たちは自然な愛着をもって触れる。すなわち生命は、自らを生み出す基盤を好むと同時に、心のどこかで「死」をも欲しているのである。

グレート・マザー

こうした「生と死の共存性」を、ユングは「グレート・マザー」という名称に託した。グレート・マザーは、日本語では「大母」と訳されるが、この大母の本質をして、ユングは「生み吞み込むもの」と喝破している。

それは命を生み育む優しい母であるが、同時に、命を刈り取る恐ろしいカーリーでもある。カーリーというのはインドの女神で、恐ろしい形相をした死神である。

私は、ユング心理学を学び始めたばかりの時には、大母の「生み吞み込むもの」という形容に違和感を持っていた。吞み込むとは不穏すぎる表現ではあるまいか、と。あまりにも「死」を連想させないかと。しかし今は違う。すなわち、母なる大地に、それを構成する「黒い土」の性質を重ね合わせると「生み吞み込むもの」という言葉に、スッと納得がいくってしまう。

なぜなら「母なる大地」は、それが生命をうみだす限りにおいて、必然的に死にも接触しているものだからだ。彼女はほかでもなく、死によって、命をこしらえるのである。

（3）温かな泥

光と共存する闇Ⅱ黒

確認しておくが、もちろん黒は闇に似ている。しかし光の下にあっても、黒は黒でいられる。私たちは白いノートに黒い文字を書くことも出来るし、黒板にチョークで絵を描くことも出来る。

そこには明らかに「光と闇の共存」の要素がある。

だから、あえて黒を闇に引き寄せて表現するならば、それは「薄闇」の発現であると言えるだろう。夜で言えば、それは漆黒の闇夜ではなく、月明かりで照らされた、薄暗い「月夜」である。

その薄暗さのなかにあって、形象は明確な輪郭を失って、周囲にあるものとの見分けがつかなくなる。これが純粹な漆黒であれば、闇は闇でしかないという「一致」が起こるだろう。すなわち虚無による一致であるが、逆に、薄暗さのなかでは、周囲との「混在」が起こるのである。

このように表現すれば、私が何を言いたいのか、察しがつく読者も出てくるだろう。そう、私はこの薄闇、あるいは「黒」という色は、完璧に「混在的一者」のアレゴリーになっていると言いたいのである。

アレゴリーとは寓意（ほかの物事にかこつけ、ほめかした表現）のことである。

けだし、黒が混在的一者のアレゴリーであるならば、その薄闇的な性質は、母と子を混在させて一つにする媒介になると言える。また成熟した男女を無選択に交わらせて一つにするときの媒介になるとも言える（性的オルギア）。

となれば、その薄闇は、命を生みだし、命を育む「いと柔らかい、温かな暗さ」を持っているのである。

泥の真実

右の混在的一者の状態は「泥」に似ていると言えるかもしれない。清潔好きな自我（座標5）からすれば、混在的一者の性的オルギア（無選択的な男女の交わり）は、汚泥のように不潔で汚らしく見えるだろうからだ。

しかし他面、そこには生命力にあふれた「泥の真実」がある。

泥の形成にとって不可欠なのは、誰の目にも明らかのように「土」と「水」である。

しかし同じ土であっても、黒土のしたに横たわっている赤土は、水との相性が悪い。すなわち赤土は、自らのうちに水を貯め、そのまま水と共存するということが不得手なのである。

そのため赤土は、一度大雨が降るやいなや、大量の水と一緒にになって、濁流としてその場から離れ去ってしまう。つまり流動性が強いということだ。

しかし、黒土と水が混ざってできた泥は違う。黒い土はスポンジのように、小さな隙間をたくさん持っているのだ。そして、この隙間に大量の水を貯蔵することが出来る。

結果として、長雨を強いられても、黒土の泥は濁流を生みださずに、ずっとその場に留まる。つまり不動性が強いということである。

もちろん、そのぐらい不動でなければ、そこからゆっくりと草木を生え出させることも出来ないだろう。そして、母なる大地としての泥は、それぐらい不動であってこそ、人々の心に「故郷」としてのイメージを喚起させるのである。誰だって、流動する故郷などは聞いたこともないだろう。

こうした点から考えてみると、母と故郷のイメージは、かなりの割合で重なりあっているとさえ言うだろう。ゆえに、これもまた、混在的一者のアレゴリーとしての「泥の真実」だと評せるだろう。

森の薄暗さ

泥の真実は、水の貯蔵による不動性だけにあるのではない。

黒土による泥は、そこから多くの木々を生え出させ、その木々の葉が、日光を遮ってくれる。そして、この遮蔽性が、せわしない水の蒸発から、大地を守ってくれるのである。そこにはもちろん、薄暗い森の風景があることだろう。

それと対照的な風景として、読者にあっては、ユダヤの赤茶けた土地柄を思い浮かべてほしい。いわ

ゆる「砂漠の民」が住む土地の風景である。

そこでは、強烈な日光により、あらゆる水分が蒸発してしまっている。ゆえに優しい命の匂いなど、きれいさっぱり消失してしまっている。

それだからこそ、かの地では、混在的一者的な母性原理が、潮が引くように後退してしまった。そうして、後退したものを補填するように、あの父性原理の権化のような「律法」が出来上がったのだ。

ユダヤ地方の、薄暗さからは無縁で、ただただ強烈な日光と、色濃い影だけが支配する世界——それは正邪（＝光と影）を厳格に弁別した「律法」を生むには、じつに適した環境であったことだろう。

ただし、かのイエス・キリストが生まれ育った、ガリラヤ地方の事情は、少しばかりそれと異なる。

というのも、そこはユダヤ地方ではあっても、ガリラヤ湖の恵みに浴して、黒い土や薄暗い森とも無縁ではなかったからだ。それだからこそイエスの教えには、女性的な優しさが伴っているのかもしれない。

かかるガリラヤの気候は、日本と同じく亜熱帯である。これは要するに「適度に暖かい」ということだ。それによって泥は温まり、植物を萌えだたせるのに最適な状態となる。

よってそこでは、何にも曲げられることなく、泥の豊かさ、泥の真実が発揮されることになるのである。

第2章

膨張色と吸収色

（1）彩度と明度の確認

色相環の底部

黒や白という色は「色み」「色相」というものを持っていない。それだから色相環に入っていない。
色相環とは、まさしく「色の環」である。たとえば赤からオレンジ、オレンジから黄色へ、という具合に、次第に変化していく色のグラデーションを、円形につなげたものなのだ。

P
C
C
S
の
色
相
環
.
p
n
g



PCCS

(プラクティカル・カラー・
コーディネート・システム)

しかし、その輪のどこにも、黒と白の居場所はないのである。

その点からすれば、前章において「色である」と定義したものの、やはり黒と白は、ちょっとした「色の特殊枠」に入ってくると言わざるを得ない。

では、一般的な色として、この『色彩の寓意』において、黒の次に語るべき色は何色になるだろう。一体どのような色が、それに相応しいだろうか。

この問いの答えとして最も適切と思われるのが「紫」である。紫はPCCSの色相環の中で、もっとも黒に近い場所、すなわち色相環の底部に置かれている色だからだ。

では、どうして紫は、色相環の底部に置かれているのだろうか。まるでレベルが低いとも言われているようで、紫色の愛好者にとっては、きっと面白い話ではないに違いない。

けれども、ここには、ちゃんとした理由があるのだ。それは「紫という色の彩度を最高に高めたとき、その色は、他のどの色よりも明度が低くなる」からである。これが正当な理由である。

とはいえ、このような言い方で、私の意図していることを、スッと理解できる読者は、ごく少数だろう。序章でも「彩度」や「明度」という言葉には触れているが、そこでは間違いなく、これらの語に関する説明が不足している。

よって、私には右の「理由」を、読者の理解が届く程度まで、解きほぐす義務があるように思われる。そのように言うことが出来るだろう。

彩度と明度

彩度とは、その文字通りに「鮮やかさの度合い」である。そして「彩度が最高の状態にある」ということは「その色の個性が、如何なる要素にも遮られず、率直に発露されている」ということであると考えれば分かりやすいだろう。

とはいえ、この「鮮やかさ」というものは、なかなかの曲者なのである。それというのも「色を明るくすれば鮮やかになる」という定式も存在しなければ「色を暗く濃くすれば鮮やかになる」という定式も存在しないからだ。

となれば、色というものは、それぞれで「自分を鮮やかにするための、異なった明るさを持っている」ということになってくる。

これは実例を挙げれば分かりやすくなるだろう。

序章でも語ったが、黄色は、極端なまでに明るくしたほうが鮮やかに見える。そして、もともとPCCSの縦軸は明度、つまり「色の明るさと暗さ」を司っている。もちろん、上に行くほど明るくなり、下に行くほど暗くなる設定だ。

そのような規定のなかにある黄色が最上位にあるのは、まさに「黄色は明るいほうが鮮やかになる」からなのである。

その他の色について

赤などは、それが最も鮮やかになるためには、中ほどの明るさ（黄色と紫の中間域）に置くのが一番なのである。あの鮮烈なバラ色は、明るすぎもしなければ、暗すぎもしないところで、最も明確に、自己の魅力を発揮する。

緑もまた、最高の鮮やかさを発揮するために、赤と同じだけの明るさを要求する。補色の関係にある緑と赤であるが、両者の純色は、同じだけの明るさを要求するのである。赤と緑は「まったく似ていない、だがそれでも確かに血のつながっている双子」のようなものである。

そして紫だ。この色はやや暗いところに置いてやることで、もっとも鮮やかな個性を発露する。やはり紫は、やや暗いところに置かれていてこそ、そのドギツイまでの個性を輝かせるのだ。

そしてPCCSは、はなから各色相の彩度が最大になる場所に、各々の色を配置している。そのため紫は、色相環の底部に置かれる「しかない」のである。

そしてそれは、紫が黒のつぎに語られるべき色であることを示している。

（2）外から内へと収縮する色

ゲーテの「色彩論」から

ゲーテの色彩論にこうある。

——黄色がつねに何か光を伴っているように、青はつねに何か暗いものを伴っているという事ができる。明るいのもののように向かう暗いものの運動と、暗いものものように向かう明るいものの運動によく注意すべきである。

暗い対象は同じ大きさの明るい対象より小さく見える。

受動（マイナス）の側に闇、暗いもの、黒いものに付随して惹き起こされるものは、青またはむしろ赤みがかった青（＝紫）の現象を直接に伴っている。

マイナス側の色彩は青・赤青色（＝紫）・青赤色（＝紫）である。

われわれから逃れていく快い対象を追いかけたくなるように、われわれは青いものを好んで見つめるが、それは青いものがわれわれに向かって迫ってくるからではなく、むしろそれがわれわれを引きつけるからである——

膨張色と収縮色

こうした考察を整理しながら生まれたのが「膨張色」と「収縮色」の概念である。簡単に言うと、黄色のような明るい色には、内側から外側に向かっていくベクトルが内蔵されており、そのため本来の面積よりも膨張して見える。

反対に、紫色のような暗い色には、外側から内側に向かっていくベクトルが内蔵されており、そのため本来の面積よりも縮小して見える、ということだ。

ここで、いかにも読者が疑問を持ちそうな点を整理しておこう。

まず青が収縮して見えるという点だが、これは多分に心理的な影響である。

それに対して、紫が収縮して見えるのは、多分に物理的な理由による。この膨張収縮の現象はもっぱら、色の明度に関わっているからだ。

つまり明度が低いほど、物理的な収縮率が強くなる、ということだ。そして、先刻述べたように、P C C Sにおいて、明度が最も低い純色を持つのが、他ならぬ「紫」なのである。

引きつける色

では、もうひとつの「読者が疑問を持ちそうな点」について述べよう。

すなわち、外側から内側に向かっていくベクトルがあるとすれば、それは中心にある色以外の「外部的な何者か」による働きではないか、と疑念。換言すれば「紫」自体とは何ら関わりない「外側から押しつける力」が、そこに介在しているのではないか、という疑問だ。

となれば読者の幾人かは「これまでに我々は、そんな力の話などは聞いていないぞ」と文句を言うかもしれない。

しかし、そこはゲーテの「引きつける」という言葉を援用すれば、わりあい簡単に、話の整理をつけることが出来るだろう。

要するに、ここで働いている力は、掃除機のそれのようなものだ。周りに何もなくても、掃除機が周囲の空気を吸い寄せれば、そこには「外側から内側に向かっていくベクトル」が生じる。

それと同じように、中心に置かれた色に「吸い寄せる」「引き付ける」ような性質があったならば、その周辺には自動的に「外側から内側に向かうベクトル」が生じることになるのである。たとえば「外側から押しつける力」がなかったとしてもだ。

光を吸収する色

少し補足的に語っておこう。

ゲーテは青と黄色を比較して、青を収縮色、黄色を膨張色と呼んだ。これは日常的に人の目が感じる

印象であるが、たとえば収縮色の服を着れば痩せて見えるし、膨張色の服を着れば太って見える。

その上で、緑や紫は、収縮も膨張もしない中間色とされるが、これには大いに疑問が残る。というのも、ゲーテ自身によって、黒、あるいは暗い色が収縮色とされているからである。すなわち、

「暗い対象は同じ大きさの明るい対象より小さく見える。受動の側に闇、暗いもの黒いもの〔があるから〕だ。この現象は暗い色」に付随して惹き起こされる」

という具合にだ。

物理的に見るならば、黒が光を吸収することは明らかである。かつ、黒は、ほんとうに最低限の光しか発しない。だからこそ最も暗い色なのであって、そこには明らかに「外部から内部へ」という光の流れが見られる。

そして、光を力に置き換えると分かりやすいが、外側から内に向かって力がかけられれば、中心にあるものは縮む。収縮する。であれば、最低限「暗い色には、収縮との強いつながりがある」ということは確実と言える。

なら紫はどうだろう。黒に準じて暗い色である紫は、当然のように収縮するのではないだろうか。私にはそのように思われる。

たしかに心理的には、青い色のほうが寒々としていて「身が縮む」「心が縮む」というような印象を強く受ける。だが物理的には、紫のほうがより多く光を吸収して「収縮」のメカニズムを正確に体现することになるのである。

よって本書では、紫色をして、青以上に純粋な収縮色として取り扱うことにする。

第3章 紫（座標2）

（1）外向的な色

ユングの言う「外向タイプ」

確認しておく、収縮色である紫には「外側から内側へ」というベクトルが見られる。

そして、これを心理的なアレゴリー（寓意）として見ると、私には、すぐさまユングのタイプ論における「外向型」の類型が思い出される。

外向型とは、これを命名したユングによれば、

「もっぱら客体や客観的な既成事実（＝自分の外側にあるもの）を基準にして、自ら（＝内側）を方向づけ、そのため重要な決断や行動が、主観的な意見ではなく、客観的な状況に左右される場合」のことを言う。そして、

「これが習慣になったものを外向的タイプと呼ぶ。彼の意識は外に向いている」ということになる。そうであれば、彼ら外向タイプの意識は、明らかに「外側から内側へ」の方向性を持っていることになるだろう。

客観的なものとは

客観的であるとは、一般に「誰の目にも見えるもの」「誰の目にも見えること」である。では私たちの目には、普段いったい何が見えているのだろうか。

簡単に言い切ってしまう、それは物質であり、モノである。

そして、そのような物質ばかりが目に入ってくるならば、外向的な人々にとってのアドバンテージ（優位性）は、物質的に豊かであることになる。そしてこれは当然、物資を購入するための道具である「お金」を多く持っていることへの重視にも、つながっていくことだろう。

となれば、お金（資産）を持っている上に、誰からも見える立派な家や車（物資）を持っていたならば、それは彼らにとって「最高の状態」ということになる。むしろ肉体的なルックスの良さも、当然その持ち物のなかに入ってくるだろう。

また彼らは、誰からも視認できるような、栄誉や名誉も大好きである。ことに賞状やトロフィー、勲章、免状、肩書きなどは典型だ。それは目に見える「優位性の証拠品」として、彼らに幸福感を与えるからである。

占いについて

もともと、彼ら外向タイプの人々にも、スピリチュアルな要素はある。それが「占い」である。

これは目に見えない世界を取り扱うものであるが、それでも本質的なところで「外側から内側へ」というベクトルが見られる。そこに性質の一致点があるため、外向タイプは、どうしても「占い」というものが気になってしまうのである。

というのも、大方の占いは「このように行動すると君は幸せになる」「このようにすると君は不幸になってしまう」という形によって、人に幸福や安心への筋道を教えるものだからである。

つまり占いは、外部要因の変更によって、主体の幸福感や安心感に影響を与えようとするものなのだ。だから内面軽視の外向タイプによっても、これを真剣に実践することが充分に可能なのである。

そのさい彼らは「ではどうして、そのような外部要因の変更によって、自分の運命が変わってゆくのか」については問わない。つまり道理は問わない。実際こういった「内面的道理」については、彼らは気にしないし、気になりもしないのである。

そのような思考の流れは、彼らは全くと言っていいほど取り扱わないし、問題視しない。外向タイプの関心は、あくまでも外部的な事象に限られているからである。

たとえば占いには、ラッキーアイテムとか、ラッキーパーソンがよく出てくる。だが占い師は、どうしてそれがあると幸せになるのかは説明しないし、むしろ「しない」ほうが良いぐらいなのだ。

というのも、外向タイプの人間は、そのような説明がないほうが、煩わしさを感じることなく、心安んじて、占い師からのアドバイスを、信じる事が出来るからである。もちろん個人差はあるだろうが、大まかに捉えれば、確かにそのように言えるだろう。

こうしたところからも分かるとおり、スピリチュアルな世界のことですら、彼らにとっての問題は、あくまで外部的な領域に限られているのである。

（2）昆虫に似ている精神構造

支えが外側にあるということ

すでにお分かりだろうが、物質的なものを愛する外向タイプの関心は、ほとんどの場面で「感覚的なもの」だけに集中する。すなわち、自分の手で触れられるもの、目で追えるもの、耳に聞こえるもの、口で味わえるものなどに対してのみ、彼らの関心の扉は開かれているのである。

これは要するに、彼らの心を支えるものが、肉体の表層（皮膚や感覚器）にあるということだ。

そのことから思い出されるのが、甲殻類や昆虫の体の構造である。つまり、体を支える部位——脊椎動物における「骨」——が「殻」として、体の表面に配置されているということである。

そのような殻の固さに比べると、エビやカニ、カブトムシやクワガタの身体内部は、まことにフニャ

フニヤの状態にある。子供のころに捕ったカブトムシなどは、フニヤフニヤどころか、ほとんど中身がスカスカという感じだった。

これは私には、寓意的に「内面性の脆弱」「心への無関心」を表しているように思われる。外向タイプと昆虫類には、その心身の構造性において、どこか通じ合うところがあるということだ。

もっとも、原生生物やミミズともなれば、体全体がフニヤフニヤである。それと比べれば甲殻類や昆虫は、よほど高次の進化をしているとも言えよう。

そういえば、扁形動物のプラナリアなどは、共食いをすると、食べた相手の記憶が、自分の記憶になってしまうという。それぐらいに自他の区別がないということだ。これは私たちに「混在的一者」のレベルにおける意識性を思い起こさせる。

本能の強さ

昆虫類の特徴としては、ほかに「本能の強さ」が挙げられる。

ハチなどは特に顕著であろう。指導教育を受けたわけでもないのに、ただ本能に動かされるままに、あの見事な六角形構造の巣を作り上げてしまうのだから。

そのほか、帰巢本能や、分化された生殖本能（発情期とそうでない時期の弁別）などの本能も、人間では到底到達できないほど、洗練されたレベルに達している。

無論そこまでのレベルには達してはいないが、外向タイプの人間もまた、実に本能的なメンタリティを持っている存在である。

そう、まことに彼らの願望は、第一に「本能を満たすこと」なのであって、睡眠や食欲、性欲が満たされることを何よりも喜ぶ。自己保存の本能もかなり強い。

むろん、それによって健康的な肉体や、国の人口までもが確保されるのだから、これを一概に貶めることは許されない。

しかも、人口が増えすぎれば、動物的な闘争本能によって、何者かと戦争を起こすことになる。その結果として人口を減らすのだから、この本能に依拠したシステムも、相当に洗練された立派なものだと思う。

もっとも、現代のように妙に文明が進んでしまうと、動物的な闘争本能に、科学的なテクノロジーが付加されてしまう。それによって——人口減少どころではない——大規模な自滅へのドアが開かれてしまうので、この問題は、やや複雑化していると言えるだろう。

その点で万全とは言えないが、闘争本能そのものは、私は、ハチの巣の構造と同じぐらいに見事な「自然の知恵の賜物」だと思っている。

とはいっても、それは結局、彼らが「本能」に突き動かされるままに為していることだ。よって彼ら外向タイプの「意志」とは、それほど関係がない。意志と本能は似て非なるもの、というよりは全くの別物なのだ。

いや、彼ら自身は、自分の「意志」を満たしていると思っている。心の底から、自分たちは自由に行動

しているのだと思っている。

だが、それを外側から眺めてみると、本当に「神さまの手の上で、操り人形のように踊らされている（＝本能によって操作されている）」ようにしか見えないのである。

繰り返すが、本能を満たすことと、自由であることは、本能的欲求が強いことと、意志が強いことは、決して同一のことではない。

（3）制服の効能

外側に「自分は何者か」を求める

話を戻すが、体の外側（表層）に自身のアイデンティティ（自分が自分である根拠）を求める外向タイプは、なるべく目に見える形でもって「私は何者か」を示そうとする。

その典型的なシステムこそが「制服」なのではないだろうか。中身が何であれ、制服さえ着てしまえば、彼が何者であるかは——少なくとも外面的には——しっかりと規定してしまうことが出来る。

つまり、コックの制服を着ればコックに見えるし、軍服を着れば軍人に見えるのだ。もちろん、ある会社の制服は、それを着ている者の「会社への帰属性」を雄弁に示すことが出来る。

それだから制服を着ることは、彼我ともに一種の安心感を生じさせる。アイデンティティ上の安心感をである。

なお、右で当人だけでなく「彼我ともに」と言ったのは、幾分かでも相手が何者か分かれば、こちら（これも外向タイプと仮定すべきだ）も認知的な安心感が得られるからである。

学生や警察の場合

じっさい学生服など、この彼我の安心感によって、まだ心が柔弱な少女を「体の外側から」守っているかのように見える。

学生のほうから見ても、制服さえ着ていれば、人はある程度「私は何者か」について、答えを持っているような気がしてくる。たとえ本当は、まだ全然アイデンティティなど確立していなくとも、である。

このような制服のシステムが、彼らにとって、どれだけ心の支えになることか。

実際「私は中学生である」「私は高校生である」「私は何々チームの選手である」といった情報を伝える制服によって、どれほどスムーズに社会が回るか分からない。

たとえば、警察官が制服なしで「警察の仕事」をするのは大変難しいことになるだろう。私服の人間

が、職務質問などしてきたら、誰だって不審がって逃げようとする。私服警察だって、警察手帳というミニ制服があるからこそ、どうにか警察として振るまうことが出来るのである。

ガードマンなどは、その警察に「擬態」しているが、これこそ昆虫的発想の賜物ではあるまいか。警察っぽい外面を示すことで、彼らは、本来何の権限も持っていない自分たちに、警察的な権威を上乗せしているのだ。これによって彼らは、自分たちの半ば強権的な活動を、数等やりやすいものになっている。逆にいうと、制服もなしに「社会的に影響力のある役割」を演じることは、制服アリの状態に比べて数段むずかしい。

敢えてそれをするならば、そのときの彼は「内面から湧き出るようなカリスマ性」を、準備しておかなければならないだろう。しかし紫の明度レベルでは、それを実際に成し遂げることは、まずもって不可能であると思われる。

もし不可能でない場合の話をするならば、それは「内側から外側へ」というベクトルをもつ、膨張色（黄色）の章においてでなければならない。

脱皮と変態

ところで、甲殻類や昆虫には、その成長の過程において「脱皮」や「変態」といった重大イベントが起きる。このイベントによって、甲殻類や昆虫は、その形態に著しい変化を起こすことになる。

これが、もしも体を支える部位が、肉体の中心部に骨として在ったならば、その成長は、漸次的で緩やかなものになるだろう。柔らかい皮膚が、ゆっくり少しずつ変化してゆけばいいのだからである。

しかし、体の外部が「固い殻」で包まれているのは、とてもではないが、そのような訳にはいかない。こうした場合における成長は、全く新しい殻を、節目節目（体が急に大きくなるとき）で作り直すという、劇的で突発的なものとならざるを得ないのである。

それが卵、幼虫、さなぎ、成虫、といった昆虫の「変態」や、自分の体の成長を封じている皮革を脱ぎすてる「脱皮」という形式に帰着することになる。

彼ら昆虫たちは、一度固くなってしまった殻を、都合よく再び柔らかくすることなどは、一切できないのだ。それだから殻を「脱ぎ捨てる」必要が出てくるのである。

式典と制服の更新

紫色の体現者、つまり外向的な人間にあっては、これが「式典」とか「制服の更新」という形で、社会的に現れることになる。

すなわち、お宮参り、七五三、小学校入学式、中学校入学式、立志式、高校入学式、大学入学式、成人式、入社式、など、さまざまな式典があり、その度ごとに、身に着ける制服も大きく変化するのである。私などは学生時代に「このような外面的な変化によって、人間の内面までもが、大きく変わるものな

のか」という疑問を捨てきれないクチだった。

ことに二十歳を迎えたときなど、自分を振りかえってみたとき、そのメンタリティがまるで子供のままであったことを、よく覚えていいる。これでは、とても成人などとは言えないぞ、と。

だがこれは、ものの考え方としては、その真逆が正解なのである。つまり、こうした脱皮的、変態的儀式をしたのだから「それによって己の内面も変えなさい」というのが、本来の社会的趣旨なのだ。

そうであるのは、紫の段階においては、これが最も効率的な「成長の促し」だからである。

事実、多くの人たちが、制服が変わるたびに、自分が成長していると「信じて」いる。ここでは、そういう信仰と心構えこそが重大なのであって、それが現実にならうであるかは、押しなべて二義的なものに過ぎないのである。

とはいえ「内面的な心の成長こそ重要」と思っている人間にあつては、こうした「成長の促し」は、やはりどこか欺瞞じみて見えてしまう。成人と呼ばれる人たちから、三歳児のような大人気さを見出すこともしばしばだからである。

蛇足ではあるが、制服の色と言えば、私はどうしても最初に、紺とか黒を想起してしまう。そして、これらの色は、PCCS的に、かなり紫に近いところにある。紺などは紫族の色だと言ってもいいだろう。

ここに紫と制服との親近性を見るのは私だけだろうか。

第4章

異質なものの平等性

（1）価値の並列

同じ座標に並ぶ二色

PCCSを見ると、赤と緑が、まったく同じ高さで並列しているのに気づかされる。そして、なぜそのように並んでいるかと言えば、それは赤と緑の純色（彩度が一番高まっている状態）が、明度的に同じ高さにあるからである。

POCS. PHB



換言すれば、各々の色が最も鮮やかであるとき——最も鮮明に自己の個性を発揮しているとき——赤と緑は、その色の明るさが等しいのである。

それは「明るさ」という基準のもとで、赤と緑という二つの色が、まったく同じだけの価値を持っているということだ。

しかも、赤と緑は——本当に「見てのとおり」なのだが——人に与える印象がまったく異なっている。補色関係（反対色）にあるのだから当たり前だが、まさに似ても似つかない色である。ゲーテは自身の『色彩論』の中で次のように言う。

まず赤について。

「この色彩のかもしれないが、霧気はつねに厳粛で華麗である。

深紅色のガラスを通して見ると、明るく照らされた風景はものすごく「激しく」見える。最後の審判の日に天と地をおおう色調はこのようであるに違いない」

つぎに緑色について。

「われわれの眼は緑色の中に現実的満足を見出す（中略）目と心情がこの混合されたものの上で安らぐことは、単純〔で完全〕なものの場合と変わらない。われわれはそれ以上を欲することはなく、またそうすることもできない」

異なる個性の平等

華麗と激しさ（赤）に対する、安らいだ満足（緑）——まさしく傾向として正反対である。反対色の概念そのものと言ってもいい。

ところが、そうでありながらも、PCCSを見るかぎりにおいて、赤と緑は、内包する価値（明度）としては、全く同じだけの重みを持っているのである。

これは、異なった個性に対して、それでも「人間はみな平等」「一人につき一票」という等しい価値を与える民主主義の思想、あるいは平等思想に似ていると言える。そのあたりに「赤と緑」の最も重要な寓意がありそうだ。

日本の平等思想

平等思想と正反対の立場をとるのが、身分差別の思想である。私たちの日本にも、四民平等「以前」の時代には「士農工商」という身分差別があった。

士農工商——この四字熟語にあつては、一番身分が高い士（武士）から順当に、下に向かってランクが下がっていく。

これは儒教に基づく差別なのであるが、見てのとおり四番目にくるのが「商」の文字だ。つまりそこでは商業、商人が最もランクが低い身分とされている。

がんらい儒教では、ものを創造しないで、ただ物品を流通させるだけで利益を上げる「商業」を蔑視していた。それはユダヤの金融業が、キリスト教徒たちから「非人間的な高利貸し」と蔑視されていた状況に、わりと似ているかもしれない。

その点「農」すなわち農業は、万民の食を支える穀物や野菜を生み出すので、かなりの上位にランクされている。工業（工）も製品を作るが、農作物と比べると、その工芸品的なものは、しょせんは二次的なものだと思われるだろうだ。

そして「農」の上に「士」武士」が乗っかるわけことになる。

支配者である武士は租税（米）を徴収するも、自分たちでは商業活動は行わない。それは彼らが、儒教を取り込んだ「武士道」に従うことで、商業自体を蔑視、軽視するようになってしまったからだ。

これがいわゆる「武士は食わねど高楊枝」の状態である。つまり、支配階級がなぜか貧乏で、下賤な階級にある商人の方がよほど金を持っている、という奇妙な状況のことだ。

ヨーロッパの人たちには、これがまことに奇異に見えるものらしい。彼らにとっては、経済的に豊かであってこそ、支配階級であるからだ。キリスト教会ですら、現世的支配者であったときには大富豪に他ならなかった。

明治に実現した平等

幕末、頑ななまでに「儒教的倫理」に忠実だった江戸幕府が、経済的に落ちぶれ——他方、商業活動に活路を見出した薩摩藩や長州藩が、経済的に強者化する、という逆転現象が生じた。

そうして、そのような逆転状態のまま、薩長連合が幕府を倒壊させた。かくして明治時代、すなわち四民平等の世が現出したのである。

しかし、儒教的倫理のしがらみは思いのほか強く、平等思想はなかなか広がらなかった。このとき日本人の意識改革を促したのが天皇（明治天皇）である。

もっとも、すでに江戸時代末期には「天皇のもとにおける平等」が謳われていた。だがその時は、まだ幕府が政権を担っていた。これが平等思想（＝商業の肯定）の枷となっていたのだった。

それが明治時代になると、天皇自らが、自分の権威のもとに、四民の平等を布告したのである。

一八六八年に発布された「五箇条の御誓文」の第二条は「上下心を一にして、盛に経綸を行うべし」という文言である。上下心をひとつにしてとは、身分の上下を問わないで、という意味だ。

天皇の権威に逆らえる日本人はいなかったもので、曲がりなりにも「人間はみな平等」ということになった。むろん天皇陛下だけは、別枠の高位においても、である。

そして、これが日本における商業、工業の隆盛につながり、富国強兵による「外国による植民地支配の阻止」という成果を招来したのだった。

そのほかの平等思想

西欧においては、キリスト教における「神のもとでの平等」が、封建的な身分制度を崩す力となった。王侯貴族と平民の枠が取り払われたわけである。

とはいえ、その具体的な改革の始まりは、フランス革命の「平等、公平、友愛」のスローガンを待たなければならなかった。つまりイエスの死後、約一七〇〇年の時間経過を経なければならなかった。しかし、それでもキリスト教がなかったら、西欧における身分制度は現代も続いていただろう。

ちなみに日本でも——本質的にキリスト教的な——浄土真宗の信徒には「阿弥陀仏のもとでの平等」という思想があった。

しかしこれは徳川家康によって封じられ、その代わりに儒教的な「士農工商」が制度化されたのである。家康は平等による発展よりも、身分秩序による世相の静穏化（＝徳川家の安泰）を望んだのであった。さて、これまでに見たように、西欧や日本には、キリストや天皇という「平等を実現させるための強力な因子」が存在した。簡潔に表せば、これを「平等化因子」とでも呼べるだろうか。

しかしながら、その平等化因子が、純粋な儒教国（朱子学国）である中国や朝鮮には存在しなかった。それだから中国や朝鮮では、それこそ「骨の髄から」「一から十まで」平等よりも、身分によるヒエラルキー的秩序が尊ばれることになる。

そういう訳で、中国や朝鮮には、今でも本当の意味における平等は存在していない。共産党の幹部であれ、金一家であれ——一部のエリートと、それを固める軍隊、その下に絶対服従を強いられる民衆、という身分制度が、厳として存在するのである。

それは彼らの国名が、たとえ「中華人民共和国」とか「北朝鮮民主主義共和国」といった、いかにも平等を旨としたような、快い響きを持っていたとしてもだ。

（２）男尊女卑の克服

儒教文化を隠し持つテレビ

儒教はまた「男尊女卑」という身分制度の宗教でもある。そうでなければ儒教圏に「性上納」などというシステムが存在するはずもない。

あれは女性を道具としてしか見ていない、最悪なまでの「男性優位」の考えがあるからこそ、実践できることなのである。

急に何を言い出したかと思う読者もあるだろう。実は私はいま、フジテレビの「女子アナ上納」の話をしているのである。

日本のテレビ局、なかんずくフジテレビやTBS、NHKやテレビ朝日あたりは、韓国やシナの出先機関のような企業である。それゆえ局内には、当たり前のように儒教文化が浸透している。そして、こ

の儒教文化が、フジテレビで発覚した「性上納」の根源的な発生理由となったのだ。

私たちは、そのようなテレビ局が制作した番組から、日々洗脳を受けている。だからこそ——その洗脳を破るためにも——ここで男女の平等思想について考えることには、大きな意義がある。

私は、赤と緑に象徴される「似ても似つかないものが同等な価値を持っている」という考えを、非常に価値あるものだと考えている。それは何より、この考え方が、男尊女卑を根本的に解決する妙薬となり得るからである。

ウーマンリブの矛盾

とはいえ、ここで読者がへんな勘違いする前に、ある問題を思い出しておこう。それはウーマンリブの問題である。

一九七〇年代のことである。当時すでに大方は改まっていた男尊女卑が、針小棒大的に大問題とされ、かの「ウーマンリブ運動」が勃発した。この運動に集った女性たちが目的としたのは、女性の男性化による男女平等である。

ウーマンリブ運動に参集した女性たちは、それこそ男性のように荒々しく、猛々しく活動した。これが男女平等というもののだと騒々しく主張した。

しかし、その男性化した女性たちの姿に、反発を覚える者も多かった。男性はもとより、女性の中にも、そこに「本物の男女平等があるとは、到底思えない」と考える人たちが大勢いたのである。

私が生まれたのは一九七三年なので、それを同時代の空気として味わったわけではない。しかし私の感性もまた「ウーマンリブ運動に反感を覚えた人々」のそれに近いものがある。

というのも、ウーマンリブの運動家たちがやっていることは、結局は自ら「女性よりも男性のほうが高い価値を持っている」と認めるようなことだからだ。

そして彼女らの運動は、その高価値のものに対する「憧れと模倣」を体現したものに他ならない。それがウーマンリブ運動の「荒々しさ、猛々しさ、騒々しさ」となっていたわけだ。

となれば、それは結局、本物の男女平等などではさらさらなく、むしろ畸形の「男尊女卑」でしかないのではないだろうか。

男女に見る個性の違い

よって私は断言するのだが、ウーマンリブ運動のような姿勢では、真の「男女平等」は絶対に実現されない。

男女には、たしかに違いがある。その性の現れ方に「異なった特徴」がある。そのため、そこに何らかの「価値の高低差」が生じる可能性もある。

しかし、世の中には反対に「現れ方は違ってはいても、価値としては等しいものがある」という視点

もあるのだ。そして、そのように考えたほうが、思想として、より健全なものが形成されるはずである。このような考えを支えるものとして「赤と緑の等価」というPCCSのリアルほど頼もしいものはない。ここでは確かに、似ても似つかないものが平等を表明しているからである。言い方を換えれば、色相において真逆のものが、明度においては等価を示しているのである。

しかも、等価であるばかりでなく、かかる赤と緑には、自分の足らざるところを補いあう性質もある。色の場合は「補色関係」と呼ぶべきものだが、もっと汎用性のある言葉としては「相補作用」という言葉がある。

私は男女の平等とともに、この相補作用についても考察したいと思っている。

そういう訳で、次の章から本格的に「赤と緑」という二つの色について語る訳であるが、そのさい私たちは常に、この二つの色の「等価性（平等）」と「相補作用」を念頭に置くことにしよう。

色彩の寓意 I

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
